

○第51回（令和2年2月5日）評価委員会評価

令和元年度の連携排砂は、6月16日～18日に掛けて実施した。その後、6月30日～7月2日にかけて連携通砂、8月29日には細砂通過放流を実施した。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量16万 m^3 に対し、29万 m^3 となり、想定変動範囲の8万 m^3 ～24万 m^3 の上限を5万 m^3 上回った。宇奈月ダムでは、5万 m^3 が排出された。

また、連携通砂での土砂変動量は出し平ダムの堆砂量が1万 m^3 の減少、宇奈月ダムでは2万 m^3 堆積した。

令和元年度の連携排砂及び連携通砂について、今回報告のあった水質、底質および生物の環境調査結果をみる限り、連携排砂および連携通砂による一時的な環境の変化はあるものの、周囲の環境に大きな影響を及ぼしたとは考えられない。

今回の連携排砂、連携通砂及び細砂通過放流に伴う環境調査の結果から以下の知見が得られた。

◇水質調査について

- ・各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。

◇底質調査について

- ・ダム湛水池及び海域の一部地点で硫化物がやや高い値を示したものの、各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。
- また、5月に行った海域底質の追加調査(5年に1回程度)についても概ね既往の観測値と同程度であり、地形や海域による大きな違いも見受けられない。

◇水生生物調査

- ・今年度の連携排砂についてはアユ漁の解禁日（6月16日）の翌17日より実

施されたが、排砂後に行った採捕調査の結果、アユの生息が確認された。

- ・アユの胃内容物について、強熱残留物に占める砂粒分の割合は平成17年度調査と概ね同様であることが確認された。また、肥満度は他河川(常願寺川)と比較しても同程度であることが確認された。

◇細砂通過放流について

細砂通過放流の効果については平成22年より検証がなされ底質の変質抑制や下流へのSS分の供給の面で一定の効果が有ることが確認されており、今年度の細砂通過放流においても同様の効果が確認された。

◇河道の状況について

連携排砂前後の5月、11月の測量結果を比較したところ、全川にわたる堆積傾向ではなく、局所的に堆積と侵食傾向の箇所が分布していることが確認された。

◇今後の留意点

- ・出し平ダムの目標排砂量の超過要因について
次年度の計画においては水みち幅、モデル断面の設定を考慮した変動範囲の想定を行うこと。
- ・深海調査および海域底生動物の解析については、次回の評価委員会までに調査結果を報告すること。
- ・より自然に近い土砂動態に向けた連携操作方法等の検討については、今回の委員会での意見を踏まえ、次回の評価委員会までに検討結果を示すこと。
- ・次年度の環境調査においては、学識者の意見を踏まえ、調査項目や結果表現を工夫すること。

以上